

令和元年度（2019年度） 第1回 函館市地域支え合い推進協議体会議 会議概要

■ 日 時

令和元年（2019年）8月23日（金） 18時30分～20時00分

■ 場 所

総合保健センター 2階会議室

■ 議 事

報告

- ・令和元年度のくらしのサポーター養成事業について

議事

- ・助け合いを広めるための全市的な地域づくりについて

その他

■ 配付資料

- ・会議次第
- ・資料1 くらしのサポーター養成事業の進捗状況
- ・資料1 別紙1 令和元年度くらしのサポーター養成研修チラシ
- ・資料1 別紙2 くらしのサポーター登録カード
- ・資料2 助け合いを広めるための全市的な地域づくりについて

■ 出席委員（9名）

池田委員，川口委員，木村委員，酒井委員，佐々木委員，所委員，林（珠）委員，林（優）委員，丸藤委員

■ 欠席委員（2名）

阿知波委員，能川委員

■ 傍 聴（1名）

■ 市職員（事務局）

地域包括ケア推進課 小棚木課長，二木主査，古口主任技師，田畑主任主事，関主任主事  
高齢福祉課 佐藤課長

## ■ 会議要旨

池田会長

---

それでは報告「令和元年度のくらしのサポーター養成事業について」市から説明願いたい。

関主事

---

(資料1「くらしのサポーター養成事業の進捗状況」ほか別紙1, 2の資料に基づき説明)

池田会長

---

前回までの研修との違いはどうか。

関主事

---

前回の研修との違いは、ボランティア活動の具体的なイメージを掴んでいただくため、カリキュラムに函館市ボランティア連絡協議会からの「ボランティアの基礎について」、サロン実践者による「サロン等の実践について」を新設、また、サロン見学後に復習のためのカリキュラムとして、「サロン活動の振り返り」を新設した。

池田会長

---

他の委員から質問はあるか。

(特に無し)

特に無いようなので、次に進みたい。それでは議事「助け合いを広めるための全市的な地域づくりについて」市から説明願いたい。

二木主査

---

(資料2 「助け合いを広めるための全市的な地域づくりについて」に基づき説明)

池田会長

---

それでは「地域の人たちの認知症や助け合いについての意識を高め、意識醸成をしていく。」に関して、掘り下げて考えていきたい。まず、この問題が暮らしにどのように影響しているか考えていきたい。

林(珠)委員

---

一番影響を受けるのは認知症で支援が必要な方だと思う。実際に活動している中で、認知症の方に対する地域の中の考え方に温度差があり、認知症の方を支援していこうとする地域と、遠ざけようとする地域がある。どちらかというところ認知症の方に関しては施設への入所を検討してほしいなど、遠ざけようとする地域の方が多いと思う。このような現状では、函館市が掲げる「認知症になっても住み慣れた地域でその人らしい生活を営むために、地域住民同士がお互い支え合える地域づくりを行う」という目標を達成することは難しいと思う。

池田会長

---

地域の人たちの認知症に対する認識が十分でないことが原因と考えられる。

酒井副会長

---

私の関わっているケースで、本人は認知症を否定するが、認知症が原因となる金銭ト

ラブルを近所で起こしており、近所の方から早くどうかしてほしいとの声を、ヘルパー業務を行っている中で聞くことがある。金銭トラブルのケースでは書面で記録を残すようにするなど、助言を行っているが、地域で認知症の方を支え合うということはなかなか難しいことだと思う。

---

#### 林（珠）委員

結局他人ごとだと思っているのではないか。自分や身内が発症してから、認知症について知ることになると思う。

---

#### 池田会長

認知症に関して地域で問題が起きている理由にはどのようなことがあるだろうか。

---

#### 二木主査

認知症の方への認識が十分でないことと並列して、認知症の方への助け合い・支え合いが十分でないことが理由としてあると思う。

---

#### 林（珠）委員

助け合いが上手くいっていない原因の1つとして、若い世代は子育て等で時間的な余裕が無く、心の中では助けたいと思っても、行動に移せていないのではないか。高齢者の意識を変えて、高齢者も助ける側になれることをPRすることが必要だと思う。

---

#### 川口委員

昔と今の違いは、今は人権などが先行していると思う。昔であれば物忘れが出てきていることを本人以外が指摘しても問題の無い雰囲気があったが、今は周りの人が指摘しにくい雰囲気がある。

---

#### 林（珠）委員

少子高齢化が原因で、昔のような近所付き合いができていないのも問題だと思う。

---

#### 木村委員

昔より関係が希薄になっている。声をかけたいが、相手が迷惑に感じるかもしれない。そうなるのであれば、何もしないのが良いと思ってしまう。挨拶もできない間柄では助け合いができないので、顔見知りになるため、玄関前の掃除を行っているときに、家の前を通る方に挨拶し続けてみた。初めは避けられたが、次第に打ち解け雑談できるようになった。助け合いを行うには、人間関係の構築が大切で、知らない人に助けられることはできないと思う。地域の間人間関係が良くないと助け合いは難しいと思う。

---

#### 古口主任技師

今出た問題がある一方で、個別の地域ケア会議を見ていると、地域の方が多く参加して、いろいろ支援をしてくれており、函館は支え合いがある地域と感じていた。認知症の受け持ちケースができたときに、全く地域と関わりが無いケースが多いのか、ちょっとした手助けをしてくれる人が周りにいるケースが多いのか。感覚的にどうだろうか。

---

#### 酒井副会長

先ほど取り上げた方は結構人付き合いが良い方であったが、金銭トラブルが生じてきた段階で、周りの方が声を掛けなくなり、遠ざかっていった。これは仕方がないのかな

と思う。

---

#### 池田会長

いろいろな話が出てきたが、認知症の方に対する関わり方が理解されていないと思う。

---

#### 所委員

認知症という病気は嫌がられる。認知症を歯の腫れと同じように、周りに言い出せるような環境が必要で、本人が隠す、家族が隠すような状況から一步出ないと、いつまでたってもこの問題は解決しないと思う。先ほど話があったとおり、認知症の方に関する対応には地域格差があり、昔ながらの近所付き合いがあるところだと認知症の方の見守りなども可能だと思うが、住んでから日が浅いと見守りも難しいだろう。

---

#### 佐々木委員

地域格差より、年代的な格差があるのかもしれない。私事だが、父は認知症で、病気になる前は商売をしていて、人との付き合いを大切にしてきたこともあり、認知症ではあったが、いろいろな人の支えで、ギリギリまで自宅で生活ができた。この仕事をしていると、挨拶をしても返事を返さない今の若者に支え合いを求めることは難しいと思う。親父世代は近所付き合いの中で育ってきたので、その中で元気な人たちをうまく活用できれば、地域の人を支える際の助けになると思う。

---

#### 二木主査

お手本となる親父世代を見て、子供たちの気持ちが引っ張られるかもしれない。

---

#### 林（優）委員

身近に認知症の方がいると、自分のこととして受け止めると思う。認知症の方から仕事の依頼があったのでサービスを提供したが、サービスを頼んだ覚えがないと言われてしまった。対応した若い職員は、適切にサービスを提供したが、怒られたことに対して苦手意識を持ってしまい、この方からは仕事を受けないと身構え、次に依頼があった際は、上司に対応をお願いするようになった。自分の身内が認知症になった場合は、そうすることもできないので、受け入れるようになる。

---

#### 池田会長

若い人は難しいとすれば、親父世代を引っ張り出さなければならない。親父世代は何歳くらいの人であろうか。

---

#### 佐々木委員

50～60代は自分の仕事などで忙しいと思う。

---

#### 二木主査

自分の親の介護の経験がある人だと、60代後半の方か。

---

#### 佐々木委員

10年前は70代・80代のデイサービス利用が多かったが、今は90代のデイサービス利用が多い。それを考えると、デイサービスに行かなくてもいい、元気な70代・80代は時間の余裕があるのではないか。

## 池田会長

---

60代後半～70代がターゲットになりそうではないか。

## 古口主任技師

---

認知症になる前から近所付き合いができている方は、認知症になっても周りが支えてくれる可能性がある。一方で、これから60～70代になる方に、これからはあなたたちが認知症の方を支えてくださいとお願いした時、拒否反応が出るのではないかとすれば、認知症になる前に地域との繋がりを構築するのが重要になるのではないかと思う。

## 所委員

---

西部地区や東部地区に住んでいる高齢の方は、子供の住んでいる圏域に引越してしまうことも多く、今までの関係性の無い中に入っていくことになるので、町会活動等への参加も難しくなってしまうのではないかと感じる。

## 川口委員

---

住民の流出が起きると、住み慣れた地域が過疎で住めなくなってしまう。

## 林（珠）委員

---

桔梗地区では若い人が多いので、高齢の親が引越ししてくることが良くあるが、知らない人ばかりの町会やサークルには入っていきにくいとの声を聞く。

## 所委員

---

若い方は、誰とも会わず、話をせず、1人でもいいという方も多くなってきている。30代～50代でもその傾向があるように思う。

## 川口委員

---

今の町会活動は危機的状態なので、一度その在り方を考え直す必要があるのかもしれない。

## 所委員

---

40代で地域活動をしている知り合いがいるが、何の提案をしても高齢の役員が却下してしまうと聞いたことがある。意欲のある人を潰さないようにしなければならない。

## 川口委員

---

意見を聞き入れる素振りを見せるが、実際はどうだろうか。聞き入れることによって、自分たちの存在が無くなってしまおうという恐怖感もあると思う。

## 丸藤委員

---

町内会活動が上手くいっているところは、一度組織を解散し、新しい組織体を作ったところだと思う。そこまでの覚悟があるだろうか。

## 所委員

---

若い世代で結束力のある方が3～4人集まらなないと、1人だけでは変えることはできない。

## 川口委員

---

今の若い人たちは横の繋がりがあるようでない。

## 木村委員

---

町会の役員は役職を譲りたがらない傾向もある。やる人がいないと言っても、体制が変わらなければ、毎年同じことを繰り返すことになる。

## 池田会長

---

丸藤委員，町会を解体するとはどのようなことか。

## 丸藤委員

---

小規模多機能自治と言い、町会という組織を解体し、地域にあるNPOや老人クラブなどで、新しい団体を作ることになる。これを実施している所では、毎週集まり、参加者が皆で意見を言い合う。北海道では少ないが、中国地方では多くやっているところがある。

## 川口委員

---

まちづくりの核は、町会組織を末端の構成団体とする町会連合会だと思うので、それが変わっていかなければならない。しかしながら変わらないのが現状である。

## 丸藤委員

---

そのような状況を変えるには、末端の組織から、上の組織までを無くすることが必要である。

## 池田会長

---

具体的に無くするにはどうすればいいか。

## 丸藤委員

---

行政が3年位の期間をかけて、町会を無くすることを周知して歩き、期日が来たら無くしてしまう。軋轢も相当あったとは聞くが、島根県の雲南市などでやっている。

## 二木主査

---

助け合いをしようと思う気持ちがあっても、知らない人を助けることは難しい。地域の中で、顔見知りを多くすれば助け合いに繋がるという発想ではないか。

## 丸藤委員

---

危機感が無いと思う。私は東日本大震災の後、被災地に足を運んだが、近所であるかどうか、顔見知りであるかないかに関わらず、自発的に助け合いが起きていた。物凄い危機的な状況になると、皆それぞれが自発的にできることを探し、活動することになる。よって、今が危機的な状況であるということを伝えていくことも大切であると思う。戦争の際亡くなった人は人口の約3～4%，天明の大飢饉で約16%，ペストで約40%であったが、函館の人口は今後半減することになる。これは戦争や飢饉，病気よりも危機的な状況であることを認識しなければならない。しかしながら、誰もそれを感じてないと思う。

## 林（珠）委員

---

全然困っていないから、危機感も持っていないと思う。

## 池田会長

---

多くの若い方が新しい組織の中に入っていくと、所委員の発言にあったような、若い方の意見が潰されることが無くなるのではないか。

## 所委員

---

幼稚園や小学校のPTAを頑張っている方がいる。そのような30～40代の方たちが町会に入ってくれば、町会が活性化されるのではないか。町会を潰す必要は無く、そのような方たちが入ってこられるような環境づくりが必要ではないか。

## 川口委員委員

---

若い方が組織に入ってくる流れの1つがコミュニティスクールではないか。

## 林（珠）委員

---

地域活動をしているといろいろな団体と関わるが、それぞれの団体が目的を持って活動している。そのような団体が連携するには、お互いがメリットを感じなければ難しい。コミュニティスクールに関しても、学校がコミュニティスクールを実施する目的があるので、その目的に合致していかなければ、連携は難しいと思う。包括が2層のコーディネーターとして活動しているのは、まさにそこである。今までコラボしたことの無い所とコラボしようとしている。それが町会にすり替わると難しいとは思いますが、一步一步やっていくしかない。プラスアルファとして、今回共通の地域課題を検討することとなったので、この課題が解決できれば、相乗効果で良くなっていくと思う。

## 丸藤委員

---

町会に対し20代を何人、30代を何人入れなさいと言うようなことはできないのか。

## 佐藤課長

---

町会は任意団体となっているので、市であれこれ言える立場ではない。市から出しているお金も補助金である。

## 丸藤委員

---

静岡市は町会を支援するため、若い人限定のサポーターの養成講座を行っている。町会から困っていることを聞き取り、例えばホームページによる情報発信や、メールによる情報伝達で困っていると相談を受ければ、それを専門に補助するサポーターを派遣する。そうすると文句を言いたくても、自分たちができないことをやってもらうこととなるので、必然的に若い人の発言力が高まることとなる。このような講座があれば良いと思う。

## 川口委員

---

上から押さえつけられるのは昔からあることなので、それを乗り越えていかなければならないと思う。

## 林（珠）委員

---

今の人は打たれ弱いので、すぐ引き下がってしまう。

---

## 二木主査

この第1層協議体は全市的な広い考えをすることとなるが、町会連合会では各町会長の考えや意見を聞くことはないのか。

---

## 川口委員

提案はしているが、協議するところまでは行きついていない。町会組織を一度無くし、新しく作り直そうという気風は出ていない。

---

## 林（珠）委員

私の個人的な意見ではあるが、今の町会組織の機能は本当に必要であるかが疑問である。機能の見直しが必要であると思う。いろいろな町会長からよく聞く話であるが、住んでいる方から、町会に加入するメリットはあるのかと聞かれる。

---

## 佐藤課長

ある町会では、特に若い方が町会になかなか加入してくれず、それでも勧誘はしなければならぬので、加入してくれない方に、電気代の50円でいいから払って欲しいとお願いすると、結構払ってくれ、そこからだんだん町会に興味を持ち、正会員になってくれる方も中にはいるとのことで、少しでも関心を持ってもらうためには良い仕組みではないかと思う。

---

## 二木主査

町会が地域づくりの核ということでここまで話が発展したが、何を指すかに話を戻すと、地域の皆さんが助け役となるには意識が不十分であり、また、知らない人同士は助けられないので、知り合いを増やすことが必要となる。顔見知りを増やし、お互いを知っている地域をつくるのが目指す姿になると思う。また、「お互いに」というところのキーになる60～70代の世代の方を地域に引っ張り出し、その姿を見て地域を活性化させるのも目指す姿になると思うが、まとめとしてどうだろうか。

---

## 池田委員

ベースは町会なので、町会をどう活性化していくか。町会に若い人が入ってきて、いろいろな動きをしていくことで町会が活性化するのではないか。また、町会では様々なイベントをやっているんで、それに参加することにより、そこで顔見知りが増えていくのではないか。

---

## 丸藤委員

町会は行事ばかりやっているんで、若い人が興味を無くするのではないか。若い人がやりたいのはまちづくりだと思うので、真剣にこのまちを良くしていこうと考えるなら、参加すると思う。昔からの慣例行事に若者が参加するのは難しいと思う。

---

## 川口委員

地域づくりに参画してもらうには社会教育が必要だと思う。田舎を見ていると社会教育が不十分だと思う。

---

## 二木主査

いろいろと意見が出たところだが、「次のアクション」について進みたい。私のイメ



ージとしては、協議体は生活支援コーディネーターの活動をサポートするシンクタンクのような存在と捉えている。「次のアクション」については、町会活動の現状把握や、皆さん組織の代表として参画いただいているので、組織として地域課題を解決するための情報があれば、それを提案していただくと考えるがいかがか。また、多くのヒントをいただいたが、この話を進めるといふ次のミッションに入るため、どのような動きに繋がっていくといいか。

池田会長

---

今日の議論を通じて、丸藤委員にどのように動いてもらうのが良いか。

二木主査

---

今いろいろなアイデアをいただいたので、それを実現化させる動きを取りたい。次回までに報告ができるよう、動きを整理したい。主に生活支援コーディネーターが、それまでの間必要な活動を行いたい。

丸藤委員

---

次の協議体はいつ頃を予定しているか。

二木主査

---

11月下旬頃を予定している。

池田会長

---

丸藤委員と市で話しながら進めてほしいと思う。全体を通して何かあるか。  
(特に無し)  
では、これで議事を終了したい。進行を市にお返しする。

田畑主事

---

これをもって、函館市地域支え合い推進協議体の今年度第1回目の会議を終了する。